

哺乳類

哺乳類概論

概要

希少種の選定にあたっては、まず県内の哺乳類相を正確に把握する必要がある。また、九州では熊本県や宮崎県を中心に、ニホンモモンガやコウモリ類などの再確認や新記録が相次いでいる。その一方で、在来種の生息を脅かしかねないアライグマ、マングースおよびクリハラリス（タイワンリス）などの外来種の生息も確認されている。これらの外来種に関する情報は、在来種の生息状況を検討するためにも必要である。そこで、福岡県だけでなく九州全体を考慮し、9目25科71種（亜種）を念頭に調査や情報収集を行った。対象地域は海岸から山地までの陸域としたが、海棲哺乳類の中でスナメリ（鯨目ネズミイルカ科）は沿岸部の浅海域を主な生息の場とし、人の活動の影響を直接受けやすいことから、唯一海域における検討対象種とした。

調査結果や収集資料をもとに哺乳類分科会で検討した結果、福岡県に現在生息している、あるいは過去に生息していたと判断される8目19科44種を福岡県哺乳類目録として掲載し（表 哺乳-1）、これらを希少性の検討対象種とした。福岡県 RDB2001 では40種が対象であったが、今回の目録の中のノイヌ、ノネコおよびスナメリについては対象を拡大したことによるもので、実際には外来種のアライグマのみが追加された。なお、ツキノワグマとニホンリスについては、福岡県 RDB2001 と同様に「過去における県内生息の確証」が今回も得られなかったことから、検討対象外とした。

和名と学名について、スナメリ以外は「日本の哺乳類（改訂2版）」（阿部（監）、2008）に、スナメリは「The Wild Mammals of Japan」(Ohdachi et al., 2009)に準じた。

希少性の検討にあたっては、主に以下の調査結果や資料に基づき、福岡県 RDB2001 以降の生息状況の変化を可能な限り詳細に評価し、カテゴリーを決定した。

- (1) 哺乳類分科会として、ニホンモモンガとヤマネを対象に、英彦山地と脊振山地において巣箱調査を2009年3月～2011年1月に行った。使用巣箱は英彦山地で50個、脊振山地で50個であった。
- (2) 哺乳類分科会として、森林性コウモリ類を対象に、主に英彦山地（平成20年度）、脊振山地（平成21年度）および耳納山地（平成22年度）において、かすみ網とバット・ディテクターによる確認調査を行った。これらの調査時には、シャーマン・トラップによる小哺乳類の捕獲確認調査や、カワネズミの糞確認調査なども平行して行った。
- (3) 福岡県環境部自然環境課により、2010年6月2日～5日に行われた宗像市沖ノ島の調査に哺乳類分科会として2名が参加した。
- (4) 県内各地において2008年4月～2011年1月まで、哺乳類分科会の各委員が独自に個別調査を行った。調査方法は、罠による捕獲調査、目視調査、痕跡調査および聞き取り調査などであった。また、個人的に寄せられた情報や、委員各自の2008年以前の調査結果についても検討対象とした。
- (5) 国（河川水辺の国勢調査、環境省の資料）の福岡県関係資料、福岡県や県内の市町村が行った自然環境調査の報告書および古文書関係の資料の収集を行った。

福岡県 RDB2001 では、希少哺乳類として、絶滅：4種、絶滅危惧：3種、準絶滅危惧：9種、情報不足：7種の計23種であった。今回は、絶滅：4種、絶滅危惧 IA 類：1種、絶滅危惧 IB 類：1種、絶滅危惧 II 類：6種、準絶滅危惧：10種、情報不足：2種の計24種を指定した（表 哺乳-2）。

福岡県 RDB2001 と比較して、希少種数は今回1種多くなっている。これは前回検討対象外であったスナメリを「準絶滅危惧」と判断したことによるもので、基本的に同種数であった。しかし、内容的に

は福岡県 RDB2001 で「情報不足」であった 7 種について、福岡県 RDB2001 以降の情報量、分科会独自の調査結果および九州各県からの情報などを参考に、ニホンモモンガを「絶滅危惧 IA 類」に、ヤマコウモリ、テングコウモリおよびコテングコウモリを「絶滅危惧 II 類」、モモジロコウモリを「準絶滅危惧」と判断し、ノレンコウモリとオヒキコウモリはそのまま「情報不足」とした。また、カワネズミを、「準絶滅危惧」から「絶滅危惧 II 類」へ絶滅の危険度を高めた。これまでランク外であったキツネに関する情報が、県内において最近少なくなっていることから、キツネを「準絶滅危惧」とした。一方で、アナグマに関しては県内各地から最近多くの情報をもたらされていることから、「準絶滅危惧」からランク外とした。しかし、多くのアナグマ情報をもたらされている要因が明確でないことから、今後も継続調査を行うなど、注意深く動向を見守っていく必要がある。

近年、熊本県と宮崎県を中心に九州南部の森林では、約 30 年振りにニホンモモンガが数カ所で確認され、またこれまで極めて少なかったヤマネの情報量もここ数年増加している。更に、コウモリ類に関しても既存種だが新たな生息地の発見や、クロホオヒゲコウモリのように珍しい記録などが得られている。福岡県も英彦山地や脊振山地などの森林地帯を擁しており、今回の改訂にあたり、これらの地域で主にニホンモモンガ、ヤマネおよび森林性コウモリ類を対象に調査を行った。しかし、いずれも生息を確認することはできなかった。ヤマネとコウモリ類に関しては、これらの地域以外から若干の情報が得られたが、九州中・南部に比較すれば格段に情報量が少ない。

沖ノ島の調査における哺乳類分科会としての調査目的は、島の哺乳類相を明らかにすること以外に、1944 年に確認されたオヒキコウモリの生息確認、および 1955 年に捕獲され、ジネズミの 1 亜種とされたオキノシマジネズミ *Crocidura suaveolens okinoshimae* の生息状況と分類学上の課題解決（最近は、一応ニホンジネズミ *C. dsinezumi dsinezumi* とされている）にあった。結果として、両種とも生息の確認ができなかったが、希少種のヒナコウモリが新たに確認された。

多くの種が希少種として挙げられている一方で、イノシシとニホンジカについては個体数が非常に増加し、農林業などに深刻な被害を与えている。なかでもニホンジカは、林床植生や希少植物などに過度の採食圧による影響を及ぼしている。このように、哺乳類では生息個体数に増加と減少の二極化が認められる。更に県内では、特定外来種のアライグマの生息および生息域の拡大が確認され、農作物への被害に加え、人の健康への影響および生息環境をめぐる在来哺乳類との競争や餌動物である両生・爬虫類への影響などが懸念される。

各種の記載項目の「分布情報」について、希少種では基本的に情報量が少ないことから、原則として過去の全ての確認地を市町村単位で記した。しかし、個体数は少ないが、県内に広く分布している種については、煩雑さを避けるため福岡県 RDB2001 以降（情報年としては 2000 年以降）の情報のみを示した。また、市町村名については、合併して新名称となった後の情報は新名称で、旧名称時の記録や情報は「旧」を付して旧市町村名で表記した。

哺乳類分科会として本報告を作成するにあたり、委員以外に武石全慈、山根明弘、安藤元一、一柳英隆の各氏に調査協力および貴重なご意見・情報をいただいた。

表 哺乳-1 福岡県哺乳類目録

目名	科名	種名	種名
食虫目 (モグラ目)	トガリネズミ科	カワネズミ ジネズミ	<i>Chimarrogale platycephala</i> <i>Crocidura dsinezumi</i>
	モグラ科	ヒミズ コウベモグラ	<i>Urotrichus talpoides</i> <i>Mogera wogura</i>
翼手目 (コウモリ目)	キクガシラコウモリ科	キクガシラコウモリ	<i>Rhinolophus ferrumequinum</i>
		コキクガシラコウモリ	<i>Rhinolophus cornutus</i>
	ヒナコウモリ科	モモジロコウモリ	<i>Myotis macrodactylus</i>
		ノレンコウモリ	<i>Myotis nattereri</i>
		アブラコウモリ	<i>Pipistrellus abramus</i>
		ヤマコウモリ	<i>Nyctalus aviator</i>
		ヒナコウモリ	<i>Vespertilio superans</i>
		ユビナガコウモリ	<i>Miniopterus fuliginosus</i>
		テングコウモリ	<i>Murina hilgendorfi</i>
コテングコウモリ	<i>Murina ussuriensis</i>		
オヒキコウモリ科	オヒキコウモリ	<i>Tadarida insignis</i>	
霊長目(サル目)	オナガザル科	ニホンザル	<i>Macaca fuscata</i>
食肉目 (ネコ目)	イヌ科	タヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides</i>
		キツネ	<i>Vulpes vulpes</i>
		ノイヌ	<i>Canis familiaris</i>
		オオカミ	<i>Canis lupus</i>
	ネコ科	ノネコ	<i>Felis catus</i>
	イタチ科	テン	<i>Martes melampus</i>
		イタチ	<i>Mustela itatsi</i>
		チョウセンイタチ	<i>Mustela sibirica</i>
		アナグマ	<i>Meles meles</i>
		カワウソ	<i>Lutra lutra</i>
アシカ科	ニホンアシカ	<i>Zalophus japonicus</i>	
アライグマ科	アライグマ	<i>Procyon lotor</i>	
鯨目(クジラ目)	ネズミイルカ科	スナメリ	<i>Neophocaena phocaenoides</i>
偶蹄目 (ウシ目)	イノシシ科	イノシシ	<i>Sus scrofa</i>
	シカ科	ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>
	ウシ科	カモシカ	<i>Capricornis crispus</i>
齧歯目 (ネズミ目)	リス科	ニホンモモンガ	<i>Pteromys momonga</i>
		ムササビ	<i>Petaurista leucogenys</i>
	ネズミ科	スミスネズミ	<i>Eothenomys smithii</i>
		ハタネズミ	<i>Microtus montebelli</i>
		カヤネズミ	<i>Micromys minutus</i>
		アカネズミ	<i>Apodemus speciosus</i>
		ヒメネズミ	<i>Apodemus argenteus</i>
		ドブネズミ	<i>Rattus norvegicus</i>
		クマネズミ	<i>Rattus rattus</i>
		ハツカネズミ	<i>Mus musculus</i>
ヤマネ科	ヤマネ	<i>Glirulus japonicus</i>	
兎目(ウサギ目)	ウサギ科	ノウサギ	<i>Lepus brachyurus</i>

表 哺乳-2 カテゴリー新旧表

		福岡県RDB2001のカテゴリー				ランク外
		絶滅	絶滅危惧	準絶滅危惧	情報不足	
新カテゴリー (7目13科24種)	絶滅	オオカミ				
		カワウソ				
		ニホンアシカ				
		カモンカ				
	絶滅危惧 I 類	絶滅危惧 IA 類				ニホンモモンガ
	絶滅危惧 II 類		ヤマネ			
			ヒナコウモリ カヤネズミ	カワネズミ	ヤマコウモリ テングコウモリ コテングコウモリ	
準絶滅危惧			コキクガシラコウモリ コヒナガコウモリ ニホンザル イタチ ムササビ スミスネズミ ハタネズミ	モモジロコウモリ	キツネ スナメリ	
	情報不足			ルンコウモリ オヒキコウモリ		
	ランク外		アナグマ			

網掛けは福岡県RDB2001からカテゴリー変更がなかったもの

選定基準

哺乳類では、2001年版において定量的な把握が困難であったことから、定性的な判断にとどまる哺乳類分科会独自のカテゴリーを採用したが、今回は福岡県希少野生生物保護検討会議によるカテゴリーに従った。しかし、2001年版に比べ、定量的な判断をより正確に行うための十分な調査結果や資料・情報が今回得られたわけではない。基本的には2001年版での評価を基準に、それ以降の報告書や個人の情報を収集・精査するとともに、新たな調査結果および隣県での情報などを参考にし、それらを総合的に判断した。最終的には哺乳類分科会の各委員の経験に頼る面が大きかったが、委員全員で議論して評価した。特に、2001年版において「絶滅危惧」と一括評価していた内容を、「IA類」、「IB類」および「II類」に区分することはかなり困難であった。希少種の選定とカテゴリーの判断には、長期にわたる継続した調査結果の積み重ねが必要である。

ハビタット

福岡県内の哺乳類における希少種の絶滅を防止し、種多様性を堅持するための重要な生息の場として、以下のような環境が考えられる。

(1) 山地樹林

ニホンモモンガ、ヤマネ、スミスネズミおよび森林性や半洞窟性コウモリ類など、希少で森林への依存性の高い種はもちろんだが、希少性の程度とは関係なく、ほとんどの哺乳類にとって自然林は非常に重要なハビタットである。特に、釈迦岳山地、英彦山地、古処山地、三郡山地、耳納山地、筑肥山地および脊振山地に存在するブナ、ミズナラ、アカガシ、シイなどの複合群落は重要な生息環境である。また、これらの山地樹林をつなぐコリドーとしての役割を果たす平地樹林も必要である。

(2) 山地溪流

山地樹林の中を流れる溪流は、水中生活に適応した唯一の哺乳類としてのカワネズミの生息環境である。また、これらの溪流から羽化する水生昆虫類は、コウモリ類の重要な餌でもある。

(3) 社寺林

樹洞をもつ大径木は、ムササビにとって格好の生息環境であり、テンなどのねぐら環境でもある。こ

のような生息環境は、社寺林として残されていることが多く、太宰府市の太宰府天満宮，豊前市の求菩提龍王院，朝倉市の垂裕神社などが挙げられる。

(4) 自然洞窟・廃坑

北九州市の平尾台および香春町から福智町にかけての石灰岩地帯などに存在する鍾乳洞や，福岡市西区の大机島の海蝕洞などの自然洞窟，更に鉱山やダム試掘坑などの人工的な洞窟の廃坑は，洞窟性や半洞窟性コウモリ類の重要な生息環境である。特に，洞窟性コウモリ類は季節によりねぐらを使い分けることから，温度や湿度などの条件が異なる複数の洞窟が必要である。

(5) 草地・河川敷

カヤネズミやハタネズミにとって，平地から低山地にかけて広がる耕作地周辺の草地や，矢部川，筑後川，遠賀川など大河川の河川敷で，草地として維持されている環境は重要な生息地である。特に，丈の高いオギ，ススキ，チガヤなどイネ科植物の繁茂する環境は，繁殖のための球巣やラン・ウエイの形成に有利である。

保全対策

哺乳類の多くの種の生息環境は，上記ハビタットに示したように山地の自然林に依存する傾向が強い。樹洞を持つ大径木が育ち，樹林の中に山地溪流が発達しているような自然林を保全することは，希少性の評価に関わらず哺乳類にとって重要である。また，良好なハビタットであっても，一つ一つが小面積で，分断化された状態にならないような配慮も必要である。特殊な環境としての洞窟，河川敷および農耕地や樹林の周辺に広がる草地は，様々な開発や人の生活形態の変化などにより消失しつつあり，これらの環境の保全も積極的に行う必要がある。また，森林管理の状態によっては生息できる種が限定され，一部の種の個体数増加を招くなど，アンバランスな生息状況を引き起こすことも考えられることから，今後の森林の管理の在り方などを検討する必要がある。更に，アライグマなどの外来種の侵入は，同じ生息空間を占める在来種に悪影響を与えることが予想されることから，これらを野外に持ち込まないように早めの対策や県民への啓発が必要である。

参考資料

阿部 永，石井信夫，伊藤徹魯，金子之史，前田喜四雄，三浦慎悟，米田政明，1994. 日本の哺乳類，東海大学出版会

阿部 永，石井信夫，伊藤徹魯，金子之史，前田喜四雄，三浦慎悟，米田政明，2008. 日本の哺乳類 [改訂2版]，東海大学出版会.

Ohdachi, S.D., Y. Ishibashi, M.A.Iwasa & T.Saitoh, eds., 2009. The Wild Mammals of Japan. SHOUKADOH.

食肉目 (ネコ目) イヌ科	オオカミ	絶滅
<i>Canis lupus</i> (Linnaeus, 1758)		2001：絶滅，環境省：絶滅（ニホンオオカミ）
選定理由	本州以南に生息していた種はオオカミの亜種 <i>C. l. hodophilax</i> とする立場と、独立種ニホンオオカミとする立場がある。一般には、1905 年奈良県での捕獲が最後で絶滅したとされる。県内では筑前国続風土記や筑前国産物帳に記載されており、1700 年代までは生息していたと考えられる。	
分布情報	平尾台の「こむそう穴」と「人参窟第一洞」でニホンオオカミとされる頭蓋と下顎の一部が発見されているものの、時代ははっきりしない。県内の絶滅がいつの時代であったかは定かではない。	

食肉目 (ネコ目) イタチ科	カワウソ	絶滅
<i>Lutra lutra</i> (Linnaeus, 1758)		2001：絶滅，環境省：絶滅危惧 IA 類（ニホンカワウソ本州以南亜種）
選定理由	筑前国続風土記によれば「国内処々に多し」とされ、筑前国産物帳にも記載があるため、1700 年代には広く分布していたと考えられる。明治時代以降、狩猟によって減少したと考えられるが、ここ 50 年以上県内の生息記録がない。全国的には、1979 年に高知県で観察された後、確認されておらず、絶滅した可能性が高い。	
分布情報	かつては、北海道から九州まで生息していた。	

偶蹄目 (ウシ目) ウシ科	カモシカ	絶滅
<i>Capricornis crispus</i> (Temminck, 1845)		2001：絶滅，環境省：地域個体群（九州地方のカモシカ）
選定理由	県内に過去に生息していたという確実な証拠はないが、筑前国続風土記に「羚羊(にく)上座郡山中にまれにあり」と、また、筑前国産物帳には「かも志”ゝあを志”ゝなりまれにあり」と記載されている。「にく」はカモシカの別称であり、絶滅したものと考えられる。国指定特別天然記念物。日本固有種。	
分布情報	本州、四国、九州の急峻な地形に生息する。九州では大分、熊本、宮崎各県の低地照葉樹林から高地落葉樹林にまで分布するが、近年減少傾向が顕著となっている。	

食肉目 (ネコ目) アシカ科	ニホンアシカ	絶滅
<i>Zalophus japonicus</i> Peters, 1866		2001：絶滅，環境省：絶滅危惧 IA 類
選定理由	県内での生息情報は文献のみで、筑前国続風土記によれば「於呂島(現在の小呂島)と奥の島(現在の沖ノ島)などにあり、まれ也」とされているほか、宗像郡田野村と鐘崎浦との境(現在の宗像市)でも捕えられたとされている。1966 年に福岡市東区の大岳西海岸にアシカ科の動物が漂着したとの記録があるが、同定確認されていない。	
分布情報	日本海の竹島や礼文島、太平洋岸でも記録があるが、最近では情報がない。	

齧歯目 (ネズミ目) リス科	ニホンモモンガ	絶滅危惧 IA 類
<i>Pteromys momonga</i> Temminck, 1844		2001:情報不足，環境省：-
選定理由	「彦山の動物(1958)」に生息の記述があるが、これまで標本を伴う確実な記録はない。樹上性、夜行性で、目につきにくく、英彦山地と脊振山地における 2009 年から 2011 年までの巣箱調査によっても確認できなかった。しかし最近、熊本県と宮崎県での確認が相次いでおり、本県においても生息の可能性が残されていることから、絶滅危惧 IA 類とした。	
危機要因	森林伐採、植生変化	
生息状況	不明	
分布情報	不明	
種の概要	我が国には、本種他ユーラシア大陸に分布するタイリクモモンガ <i>P. volans</i> の亜種エゾモモンガ <i>P. v. orii</i> が北海道に分布する。いずれも体重 150~220g 程度で、同様に滑空するムササビ(体重約 1kg 前後)に比べてずっと小さい。最近ペットとして外国産のモモンガが販売されるようになってきており、野外ではほとんど区別ができないと考えられるので、注意が必要である。	
特記事項	日本哺乳類学会のカテゴリー(1997)では、保護すべき個体群(九州)とされている。日本固有種。	

齧歯目 (ネズミ目) ヤマネ科

ヤマネ

絶滅危惧Ⅱ類

Glirulus japonicus (Schinz, 1845)

2001:絶滅危惧, 環境省:準絶滅危惧

選定理由	英彦山で1971年に確認されて以来、県内からの情報はなかったが、2001年末から2002年春にかけて、旧築城町で連続して3頭のヤマネが発見された。2004年6月には添田町で民家に入り込んだ個体が保護され、2009年10月と2010年11月には朝倉市で、2010年9月には豊前市で確認された。この他にも情報が散見され、近隣諸県での確認状況からも断続的に分布している可能性がある。一方、英彦山地と脊振山地における2009年から2011年までの巣箱調査では確認に至らず、絶滅危惧Ⅱ類とした。
危機要因	森林伐採、植生変化、その他(自然林の減少)
生息状況	最近情報が増えつつあるが、断片的である。
分布情報	豊前市、嘉麻市、朝倉市、添田町、築上町(旧築城町)
種の概要	1属1種の日本固有種。体重約20gと小型で、樹上性・夜行性であることから目に触れる機会はほとんどない。背の中央に黒褐色の線があり、尾には長い毛を生じる。冬眠という寒冷な環境に適応した習性を持つにもかかわらず北海道には分布せず、分類学上の貴重さと生物地理学上の重要性を持つ。
特記事項	国指定天然記念物。日本固有種。

食虫目 (モグラ目) トガリネズミ科

カワネズミ

絶滅危惧Ⅱ類

Chimarrogale platycephala (Temminck, 1842)

2001:準絶滅危惧, 環境省:地域個体群(九州地方のカワネズミ)

選定理由	県内では、英彦山地、脊振山地および釈迦岳山地から確認されているが、確認地点や個体数は非常に少ない。2009年12月に添田町(英彦山地)で生息が確認されたが、新たな地域からの情報は得られていない。九州では主に脊梁山地に生息するが、九州北部地域からの情報は特に少ない。日本の哺乳類の中では、渓流域の水中という特殊な生息環境に適応した唯一の種で、環境変化の影響を受けやすい。
危機要因	河川開発、産地局限
生息状況	生息域が局限し、生息数も少ない。
分布情報	福岡市早良区、添田町、東峰村(旧宝珠山村)
種の概要	中型のネズミくらいの大きさで、前後肢の両側の剛毛が水かきの働きをする。主に森林内の山地溪流で、餌となる水生昆虫や小魚の豊富な環境に生息する。遊泳が巧みで、毛に空気を溜め、水中では銀色に輝いて見える。春から夏にかけて出産するが、詳しい生態は不明である。良好な環境が維持された山地溪流の指標種でもある。
特記事項	日本哺乳類学会のカテゴリー(1997)で、保護すべき個体群(九州)とされている。日本固有種。

翼手目 (コウモリ目) ヒナコウモリ科

ヤマコウモリ

絶滅危惧Ⅱ類

Nyctalus aviator Thomas, 1911

2001:情報不足, 環境省:準絶滅危惧

選定理由	県内では、英彦山と福岡市の大濠公園での捕獲記録だけである。2008年11月に英彦山で夜間に、本種と思われる鳴き声が聞こえたが、姿の確認はできなかった。九州でも数例の記録しかなく、限られた巨木の樹洞などを主なねぐらにしている。こうした状況から絶滅の危険性が高いと判断されるが、調査の困難さによる情報不足も考えられることから、絶滅危惧Ⅱ類とした。
危機要因	森林伐採、その他(ねぐら場所や生息域の減少)
生息状況	もともと個体数が少なく、生息域が減少している。
分布情報	添田町、福岡市中央区
種の概要	食物は鱗翅類、双翅類および甲虫類で、天敵は猛禽類である。数十頭の出産・哺育集団を形成し、多くは初夏に2仔を出産する。雌は生まれた年の秋には成獣となり、翌夏に出産する。雄は生まれて1年以後に繁殖に関与する。
特記事項	特になし

翼手目 (コウモリ目) ヒナコウモリ科		ヒナコウモリ	絶滅危惧Ⅱ類
		<i>Vespertilio sinensis</i> (Peters, 1880)	2001:絶滅危惧, 環境省:一
選定理由	生息地は一大繁殖地である福岡市の大机島と、2010年6月の調査で確認された宗像市沖ノ島の2島に局限されている。大机島は2005年3月の福岡県西方沖地震で、ねぐらとなっている海蝕洞は無事であったが、その開口部内側の岩盤が崩れ、生息への影響が心配される。国のカテゴリーではランク外とされたが、県内他地域での生息情報がなく、2001年のカテゴリーと同様に絶滅危惧Ⅱ類とした。		
危機要因	産地局限, 自然災害		
生息状況	地震翌年8月の大机島調査では、例年の半数の約300頭であった。その後の状況は不明である。		
分布情報	福岡市西区(大机島), 宗像市(沖ノ島)		
種の概要	本種のねぐらは樹洞のほか、岩の割れ目、橋桁や建造物の隙間、屋根裏も利用している。甲虫類や鱗翅類などの飛翔昆虫を食物としている。数十頭から数千頭に及ぶ出産・哺育コロニーを形成する。多くは初夏に2仔を出産する。哺育終了後、秋にはコロニーが解消する。両性とも生まれたその秋には繁殖に関与する。冬季は岩の割れ目や家屋の隙間で単独か少数の群れで冬眠する。		
特記事項	特になし		

翼手目 (コウモリ目) ヒナコウモリ科		テングコウモリ	絶滅危惧Ⅱ類
		<i>Murina hilgendorfi</i> (Peters, 1880)	2001:情報不足, 環境省:絶滅危惧Ⅱ類
選定理由	県内では1955年に福岡市箱崎の民家で初めて確認され、1958年に英彦山のヒノキ樹冠中で採集された親子の事例がある。その後、生息は確認できておらず、九州でも記録が少ない。こうした状況から絶滅の危険性は高いが、近年熊本県北部からの記録もあり、絶滅危惧Ⅱ類とした。		
危機要因	森林伐採, その他(ねぐら場所や生息域の減少)		
生息状況	もともと個体数が少なく、生息域が減少している。		
分布情報	添田町, 福岡市東区		
種の概要	昆虫食であるが、不明な点が多い。樹洞をねぐらにしているが、洞窟や廃坑・隧道の小さな窪みなどもねぐらとして利用している。哺育例として、樹洞で数頭の哺育集団が観察されている。春季には数十頭の集団が観察されることがある。夏に1~3仔を出産する。冬季は洞穴で単独か数十頭からなる集団を形成し冬眠する。		
特記事項	日本固有種。		

翼手目 (コウモリ目) ヒナコウモリ科		コテングコウモリ	絶滅危惧Ⅱ類
		<i>Murina ussuriensis</i> Ognev, 1913	2001:情報不足, 環境省:一
選定理由	甘木市(現在の朝倉市)で1999年11月に死亡個体の拾得記録があるが、2010年7月に同じ朝倉市の樹林内で休息中の個体が確認された。行動範囲は数百m前後であることから、近隣の林内にも生息している可能性が高い。九州全域では生息域が限られて個体数が極めて少ないが、熊本県では最近、複数の生息が確認されており、絶滅危惧Ⅱ類とした。		
危機要因	森林伐採, その他(採餌場所やねぐら場所の減少)		
生息状況	もともと個体数が少なく、生息域が減少している。		
分布情報	朝倉市(旧甘木市), 朝倉市		
種の概要	ねぐら場所は、樹洞、樹皮下、切り株や幹の倒木、群葉や枯葉および落ち葉など多様である。九州では交尾のピークが10月で、出産が6月初旬に行われる。複数の成獣と幼獣からなる哺育集団を形成し、離乳期は7月中旬で、その頃から幼獣は独立する。雄や非繁殖期の雌は単独でねぐらを利用する。ねぐらは頻りに替えられ、行動範囲は比較的狭い。		
特記事項	特になし		

齧歯目 (ネズミ目) ネズミ科 **カヤネズミ** **絶滅危惧Ⅱ類**

Micromys minutus (Pallas, 1771)

2001:絶滅危惧, 環境省:一

選定理由	主な生息環境は、ススキなどの高茎のイネ科植物が繁茂した河川敷や堤防の法面、沼沢地などの草地である。このような環境は、ゴルフ場、競技場、公園および駐車場などに整備され、更に護岸工事や堤防の除草などにより急激に減少している。近年増加している耕作放棄地や再造林放棄地などに繁茂した草地も利用するが、遷移により生息に適さない環境に変化する。
危機要因	湖沼開発、河川開発、湿地開発、草地開発、ため池改修、水路改修、植生変化
生息状況	県内の平地から山地までの草地に生息するが、分布域は断続的で、生息数は少ない。
分布情報	久山町、添田町、福岡市、小郡市、福津市(旧福岡町)、宗像市、岡垣町、香春町、築上町(旧築城町)、福智町(旧赤池町)、筑紫野市
種の概要	オギ・ススキ・トダシバなどの葉を巧みに編んで、直径 10cm 程の球形の巣を作る。九州では春から初夏(5~6 月)、秋から初冬(9~12 月)の年 2 回、1 産 5~6 頭の仔を産む。球巣での生活だけでなく、地下でも生活している。
特記事項	特になし

翼手目(コウモリ目)キクガシラコウモリ科 **コキクガシラコウモリ** **準絶滅危惧**

Rhinolophus cornutus Temminck, 1835

2001:準絶滅危惧, 環境省:一

選定理由	自然洞窟、廃坑、試掘坑など、特殊な環境に生息する。ねぐら場所は気温(9~21℃)と湿度(85~100%)が限定され、ねぐらを季節的に変更する必要があるため、生息環境が制約される。200 頭程度のコロニーも形成するが、生息数は多くない。キクガシラコウモリに酷似するが、約 1/2 の大きさである。日本固有種。
分布情報	糸島市(旧前原市)、福智町(旧方城町)、北九州市、東峰村、みやこ町、八女市

翼手目 (コウモリ目) ヒナコウモリ科 **モモジロコウモリ** **準絶滅危惧**

Myotis macrodactylus (Temminck, 1840)

2001:情報不足, 環境省:一

選定理由	県内での記録は、糸島市(旧前原市)の井原山廃坑と水無鍾乳洞のみである。井原山廃坑では 1974 年に数十頭からなる出産・哺育集団が観察されたが、その後落盤等で消失した。水無鍾乳洞では 1983 年に数十頭の集団が観察されたが、その後少なくなっている。近隣の県でも生息地は限られ、個体数は少ないが、自然洞窟の他に廃坑や隧道にも生息している可能性がある。
分布情報	糸島市(旧前原市)

翼手目 (コウモリ目) ヒナコウモリ科 **ユビナガコウモリ** **準絶滅危惧**

Miniopterus fuliginosus (Hodgson, 1835)

2001:準絶滅危惧, 環境省:一

選定理由	北九州市平尾台の目白洞に 1971 年頃まで 200 頭程度生息していたが、その後減少している。また、同市の千仏鍾乳洞と福智町(旧方城町)の岩屋第 II 鍾乳洞で、2010 年には八女市矢部村の廃坑で観察されているが、個体数は少ない。糸島市(旧前原市)の井原山廃坑にも生息していたが、落盤等で消失した。比較的大きい自然洞窟や廃坑を利用するため、生息域は局限されている。近隣の県でも生息地は限られ、個体数は少ない。
分布情報	北九州市小倉南区、福智町(旧方城町)、八女市

霊長目 (サル目) オナガザル科 **ニホンザル** **準絶滅危惧**

Macaca fuscata (Gray, 1870)

2001:準絶滅危惧, 環境省:一

選定理由	県内の山地に広く分布するが、群れは香春岳周辺と脊振山地のみに局限される。2008 年の福岡県と香春町の資料によれば、香春岳周辺では 2 群 160 頭が確認され、脊振山地では約 200 頭と推定されており、県内での群れの個体数は少ない。日本固有種。
分布情報	2008 年の目撃情報から県内に広く分布する。ただし、島嶼および柳川市、筑後市、大川市、小郡市、福津市、志免町、粕屋町、桂川町、糸島市(旧志摩町)、大木町、広川町、吉富町では確認されていない。

食肉目 (ネコ目) イヌ科		キツネ	準絶滅危惧
<i>Vulpes vulpes</i> (Linnaeus, 1758)		2001: 一, 環境省: 一	
選定理由	県内の平野から丘陵帯, 山地にかけて広く分布する。生息数についての調査は行われていないが, 生息情報は減少傾向にある。げっ歯類や小鳥類などを主な餌とするため, もともと生息密度が低かったことに加え, 宅地開発などによって丘陵地や山麓部の好適な生息地が減少している。		
分布情報	県内に広く分布するが, 個体数は少ない。2000年以降の情報: 桂川町, みやこ町, 北九州市		
食肉目 (ネコ目) イタチ科		イタチ	準絶滅危惧
<i>Mustela itatsi</i> (Temminck, 1844)		2001: 準絶滅危惧, 環境省: 一	
選定理由	イタチは開発などによって平野部から姿を消し, 代わって外来種であるチョウセンイタチが広く分布している。山地ではイタチは河川沿いに分布しているが, 集落や耕作地周辺ではチョウセンイタチが入り込んでおり, イタチの生息環境はかなり限定されている。脊振山地の河川沿いには広く分布しており, 他の山地でも人間活動の影響が少ない河川沿いを中心に分布している可能性もある。日本固有種。		
分布情報	那珂川町, 大野城市, 福岡市, みやこ町		
鯨目 (クジラ目) ネズミイルカ科		スナメリ	準絶滅危惧
<i>Neophocaena phocaenoides</i> (G.Cuvier, 1829)		2001: 一, 環境省: 一	
選定理由	沿岸の浅海に生息し, 小魚や甲殻類等を餌としている。従って, 人の活動による海洋汚染などの影響を受けやすい。魚網にかかって溺死する(混獲)こともある。生息域は局限され, 個体数も少なく, 減少傾向にある。10頭くらいの群で見られることもあるが, 通常1~2頭で行動する。		
分布情報	日本に5つの孤立個体群が存在し, その中の「瀬戸内海・響灘」個体群が周防灘, 関門海峡および藍島周辺に生息している。この個体群の一部は玄界灘にも生息していると思われるが, 詳細は不明である。		
齧歯目 (ネズミ目) リス科		ムササビ	準絶滅危惧
<i>Petaurista leucogenys</i> (Temminck, 1827)		2001: 準絶滅危惧, 環境省: 一	
選定理由	県内では英彦山地, 古処山地, 三郡山地および筑後川以南の山地のみで確認されている。主に山麓の社寺林などで確認されることが多く, 樹洞を利用するため, 大径木のある広葉樹林に好んで生息する。このような環境の減少や分断化が進み, 個体群の孤立化を招いているところもある。日本固有種。		
分布情報	太宰府市, 筑紫野市, 豊前市, みやこ町, 久留米市, 広川町, 八女市, 朝倉市, 添田町, 田川市, みやま市(旧瀬高町), 大牟田市		
齧歯目 (ネズミ目) ネズミ科		スミスネズミ	準絶滅危惧
<i>Eothenomys smithii</i> (Thomas, 1905)		2001: 準絶滅危惧, 環境省: 一	
選定理由	山地に生息する。特に, 高地の広葉樹林において, やや湿潤で下草が繁茂し, 比較的大きな岩が点在するような環境を好む。県内では, 高地から低山地の樹林に広く分布するが, 個体数は少ない。生息情報も近年著しく減少しているが, その要因は不明である。日本固有種。		
分布情報	県内に広く分布するが, 個体数は少ない。2000年以降の情報: 福岡市早良区, 那珂川町, 朝倉市		
齧歯目 (ネズミ目) ネズミ科		ハタネズミ	準絶滅危惧
<i>Microtus montebelli</i> (Milne-Edwards, 1872)		2001: 準絶滅危惧, 環境省: 一	
選定理由	土中のトンネルと草むらに造られたシェルター(ラン・ウェイ)を行動域とし, 主な生息環境は広い草地, 河川敷および田畑などである。県内では近年これらの環境が減少傾向にあり, 個体数も少ない。今後も都市近郊を中心に, 開発や河川改修などにより減少することが予測される。日本固有種。		
分布情報	筑後川や遠賀川の河川敷, 北九州市, 久留米市, 朝倉市, 太宰府市, 宇美町, 福岡市西区, 宗像市, 福智町, 小郡市		

翼手目 (コウモリ目) ヒナコウモリ科	レンコウモリ	情報不足
<i>Myotis nattereri</i> (Kuhl, 1817)		2001：情報不足，環境省：絶滅危惧Ⅱ類（ホンドノレンコウモリ）
選定理由	八女市(旧矢部村)の標高 500m のスギ林において、1998 年 7 月 6 日に死体が拾得されたのが県内唯一の記録であり、生息地は不明である。九州では南部を中心に生息が確認されており、近隣の県でも生息地は非常に限られ、個体数も少ない。自然洞窟、廃坑および隧道などの天井の窪みをねぐらとするが、県内からの生息地に関する情報は無い。	
分布情報	八女市(旧矢部村)	
翼手目 (コウモリ目) ヒナコウモリ科	オヒキコウモリ	情報不足
<i>Tadarida insignis</i> (Blyth, 1861)		2001：情報不足，環境省：絶滅危惧ⅠB類
選定理由	県内では、1944 年に宗像市(旧大島村)沖ノ島付近に停泊中の船内で 1 頭が採集され、1985 年に福岡市西新で 1 頭が拾得されたのみで、生息状況は不明である。近隣の県でも生息地は非常に限られ、個体数も少ない。ねぐらに岩盤や建物の狭い隙間を利用するため、確認が困難である。	
分布情報	宗像市(旧大島村), 福岡市早良区	

